Q. 不登校の子どもたちに、どう対応すればいいでしょう?

A. 渋谷区では、渋谷ピアサポート委員会の若者たちが不登校や引きこもりの子どもたちの対応をしています。どのようにかかわっているのか聞いてみました。

渋谷ピアサポート委員会

居場所で子どもたちはそれぞれ好きなことをして遊んでる

平成11年から地域の方々が中心になり渋谷ファンインという「子どもの居場所」づくりが渋谷各地で始まりました。ファンインでは若者たちが子どもたちの相談役や遊び相手として活動していました。ピアサポート委員会の活動のきっかけは、そのファンインの居場所に不登校の子どもたちが遊びに来るようになったことです。また平成13年度に渋谷区が「子どもの心サポート事業」を開始し、その委託を受けて不登校の課題に対応するようになりました。子どもの心をサポートをするために専門的な研修を受けた方々がピアサポーターとして登録しています。子どもたちにとってお兄さんお姉さんのように身近に感じる若者のピアサポーターが週１回程度、不登校の子どもの家を訪問するなどして対応しています。それを大人のピアサポーターが支援する形をとっています。 また学校や保護司、民生委員、子ども家庭支援センターなどの関係諸機関としっかり連携しながら活動を続けています。

学校との連携　ピアサポート委員会と学校をつなぐコーディネートをしているのが渋谷区教育センターコーディネーターの佐々木さんです。佐々木さんは、区内の全小中学校の要望に沿って訪問し、不登校児や集団不適応児の情報を得て対応を考えています。

佐々木さんの話　「保護者の話をよく聞き、子どもにとってどの道がいいのかを考え、いろいろな支援策につなげています。その対応の一つとしてピアサポーターによる訪問型相談を紹介しています。ピアサポーター派遣の際には、ピアサポーターを担任や保護者と引き合わせ、それから対応が始まります。子どもたちと年が近い若者がかかわり、関係を築きながらともに成長し、学校復帰だけを目標としないところがピアサポーターのいいところだと思います。」

ピアサポーターの方に活動の様子をお聞きしました。

事例1「気持ちを読んで、ペースを乱さず子どもがしたいようにさせてあげる」

中学３年生の女の子は友達とのいざこざで不登校になりました。私はその子の友達として接しました。こちらから家庭の話題には触れないようにしました。話したかったら話を聞くし、おしゃべりもしています。子どもの気持ちを読んでペースを乱さないようにしました。私が一緒に登校することもあります。

梅原さん「私はその子の友達として接しています。」

朝９時から２時間程度、教育相談室で過ごします。子どもが帰りたがると先生方は残念がりますが、無理をさせず子どもがしたいようにさせてあげています。

保護者の方の話「学校も親も学校へ戻そうと必死でしたがピアサポーターは本人の気持ちを認めてあげていました。心と心でつながっていたところが普通の大人と違っているところでした。ピアサポートの活動が広がり、子どもたちをたくさん救って欲しいと思っています。」

事例2「無理に学校へ行けとは言わない。その子に今、何が一番いいのかを考えている」

岩間さん「何もせず、ただ隣で本を読んでいたこともありました。」

中学校で引きこもりだった子に私は初め、無理にかかわろうとせず、同じ部屋に一緒にいてその子が本を読んでいるときには、私も隣で静かに本を読んでいました。毎週行くうちに次第にコミュニケーションがとれるようになり、家の中で趣味の話などをするようになりました。それがひと月ほど続いた後、外で一緒にスポーツをするようになりました。「学校へ行け」とは言いませんでした。活動がうまくいくと親も学校も期待しますが、ただ単に学校へ返せばいいという気持ちにならないようにしています。その子にとって今、何が一番いいのか考えて活動しています。

対応した子どもの話「先生（ピアサポーター）と出会って自分が変わったことは、人と話すようになったことだと思います。前はしゃべるのがいやだったけど、今は話すのが好きになりました。これからは外国に興味があるので他の国の人ともたくさん話してみたいです。」

事例3「居場所へ来るようになって、親も子どもと離れる時間ができ余裕ができた」

小学４年生の女の子が不登校気味で親が何とかしようと必死でした。親子だけで家にいるとお互いにつらかったようです。副校長先生の紹介で居場所へ遊びに来たのをきっかけにして週１度居場所へ来るようになりました。初めは母親から離れなかった子がピアサポーターと遊ぶようになりました。離れる時間ができたことで親も子も、余裕が出てき始め、表情も変わってきました。運動嫌いだった子でしたが自分からどんどん運動するようになり活発になってきました。

ピアサポーターの話「不登校対策は子どもだけでなく親へのフォローも大事だと思います。ピアサポート委員会では、私たち若者が子どもへ対応し、大人のサポーターが親への対応や私たちへの支援をしています。若者だけでは家庭にまでは入れないと思うので、この連携体制がいいのだと思います。」

ピアサポート委員会事務局の相川さんは「居場所があったからピアサポートができました。子どもの問題は関係がつくれないこと。居場所があれば子どもが来てピアサポーターと関係がつくれます。親も大人のスタッフと関係がつくれます。そして親に子どもへの対応を実際に見てもらえる。子どもへも親へも対応していくことが大事です。」と居場所の重要性を訴えました。続けて「居場所は子どもが気軽に来れる場所です。これからさらに居場所を起点にして、子ども・若者の自立支援を模索していきます。」と今後の方向性も示されました。

居場所でピアサポーターや友達と一緒に遊ぶ